
炭酸飲料

ユッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炭酸飲料

【Nコード】

N9267Y

【作者名】

ユッキー

【あらすじ】

白川と黒田は、永遠のライバル(?)。日々口論やくだらない発明を繰り返し、近隣の住民を困らせていた。

そんな中、黒田が「絶対にゲップがでない炭酸飲料」を発明して……。

「あの黒田め。くだらない発明をしおって……」

発明家・白河英作は、苛立ちを隠せないようだ。

というのも、白河英作と黒田高貴は二人とも発明家で、幼い時からライバルだった。そしてなぜか、二人とも同じ時期に研究所を建設していて、隣同士ということなのだ。

ふつうは、ライバルと隣り合わせなんて誰もがごめんだ。この二人はなんて負けず嫌いなのだろう。ケンカするほど仲がいいというのが、この二人は例外なのかもしれないしそうでないかもしれない。とにかく毎日のように、道路の真ん中でくだらない言い争いをするわ、ガーガーガーガー工事みたいにいるさい音を立てるわで、近隣の住民は困り果てていた。

この前なんか、「どちらが近隣の住民に迷惑な騒音をたてているか」という実にくだらない口論をして、ついには二人で、どちらがより静かな掃除機を作れるか、という競争にまで発展した。作っている途中で近所のおばさん二人組に「発明してる時の音がうるさい」と言われ、こっぴどく叱られたのだが。

明日黒田は、「絶対にゲップが出ない炭酸飲料」を発明したとして、正式に学会で発表する。それに白河もゲストとして呼ばれているのだ。……いや、きつと黒田は白河をゲストとして呼んだのではなく、ただ単に目の前で大発明を自慢したいから呼んだのだろう。まったく、発想がばかばかしい。しかし、こんな発明をされてみすみす指をくわえて見ているだけの白河ではない。

「見てろよ。明日ぎゃふんと言わせてやるから……」

嫌に響くカメラのシャッターを切るフラッシュの音が、白河の耳

に嫌でも突き刺さる。黒田にとってはそれが名誉なのかもしれないが、白河にとってフラッシュは夏の照りつける日差しのように、いらないものだった。

間もなく、黒田が助手を二人引き連れてやってきた。やけに派手な音を立てながら用意されていた椅子に座り、白河に向けて作り笑いを浮かべる。

——いますぐにでも、お前の所に行つてなぐり殺してやるぞコノヤロウ。

白河は興奮して体が沸騰しそうだった。その白河を見て、黒田はますます嬉しそうな顔をする。お前はどこかの国の王にでもなったつもりか。

ほどなくして、発明品の発表が始まった。なるべく白河は黒田と顔を見合わせないように目を背けようとして……やめた。この会見をめちやくちやにしてやろう。

そう考えた白河は、両手の中指で口を左右に引つ張りながら、兩人差し指で鼻の穴を押し上げ、両親指で鼻と目のちょうど中間あたりを思いっきり押し下げた。どこの幼稚園児のにらめっこだよ、と誰もが思うかもしれない。当たりである。黒田がこの顔を見て笑えば白河の勝ち、笑わなければ負け。

案の定、黒田が難しい原理を説明しながらちらりと白河のほうを盗み見た時、笑ってしまった。白河は小さくガツポーズ。しかし黒田はすぐに体勢を立て直すと、説明に戻った。

説明が終盤に差し掛かったころ、白河は勝手に「ちょっと待ってください」などとしやしやり出ながら立ち上がった。すぐさま司会者が「すいません。白河博士、質疑応答は会見の最後にお願ひします」と引き留めたが、白河のほうは気にせずしゃべりだした。こういう場面で勝手にしゃべりだす勇氣は見事である。これをもっと世のため人のためになるように活用してほしいのだが。

「炭酸飲料って、ゲップが出てなんぼじゃないんですか？　ゲップが出ない炭酸飲料なんて、炭酸飲料とは言わないのでは？」

してやったり。白河は勝ち誇った顔で黒田を見る。黒田は迷子のように一瞬たじろいだだが、すぐに言い返した。

「説明を聞いてなかったのですか？ この炭酸飲料は、炭酸独特の味などはそのままにして、ゲップだけが出ないように成分を調節したんですよ、私の技術で。ほら、炭酸を飲むのにゲップは邪魔でしょう？」

黒田は「私の技術で」をいうところを強調した。さすがに白河も、バランスを崩したように一步下がろうとして後ろの椅子に足をぶつけた。「いたっ」と言う白河のうめき声に、どこからともなく笑いが生まれる。

「……し、しかし……あなたは今『炭酸独特の味などはそのままにして』とおっしゃいましたけど、やはりゲップを抑える技術や成分を加えたのなら、炭酸そのものがそのままに保たれているとは言えないのでは？ それに、昔から親しまれてきた炭酸本来の存在が、新しい成分を加えたことにより損なわれてしまいうんじゃないかと、私は心配しているのですが」

「炭酸の味は失われていません。それに、物事は日々進化を遂げているでしょう？ 炭酸も進化するときですよ」

黒田の返答に、白河は唾を飛ばしながら力説。前に座っていた女性記者にその唾がかかり、女性記者は顔をしかめる。

「馬鹿な、進化したら昔の炭酸はなんだったんだということになってしまいうんじゃないか！」

「だから言ったでしょう？ 物事は進化を続けるものだって。いつまでも一つのことにとだわるのは、『馬鹿の一つ覚え』と言うんだ」「温故知新とよく言うだろう。古いものから学ぶものもあるから、古いものを馬鹿にするな！」

「だから古い炭酸飲料そのままの味は残っていると言っているでしょう。耳が聞こえないのか？ 耳ほじってやろうか？」

正式な会見だというのに、二人とも敬語を無視している。この子供みtainな口論（というよりケンカ）は、延々と続いた。

結局、この黒田の発明は当然のごとくボツ。二人とも修行のために寺に送られた。

ある程度修行をして帰ってきたのだが、研究所が隣同士であるため、すぐに口論が始まる。しかも二人とも発明そっちのけで、「炭酸飲料発明会見の場を乱したのはどちらか」というくだらない口論だ。完全に過去のことにとらわれている。黒田が言っていた「馬鹿の一つ覚え」とは、この二人に当てはまる。

「研究所を離せばいいのに」という意見には、二人ともこう答える。

「向こうが離ればいいのだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9267y/>

炭酸飲料

2011年12月1日19時46分発行